

岡倉天心「茶の本」について

ロータリーは心の涵養を旨としていますが、時に茶道との類似が指摘されます。明治末期、欧米は、日本人の精神について、英語表記の新渡戸稲造の「武士道」と、1906年の岡倉天心の「茶の本」によって知ることができました。

当時、日本は日露戦争に勝ち、欧米に黄禍論が出る様になっていました。「武士道」は、欧米の脅威を更に高めたので、岡倉天心は軋轢を避ける為、日本の美意識と高い精神文化をPRする「茶の本」を著しました。茶を通して精神的世界を求める東洋思想は、物質主義の欧米にとって新鮮であると共に警鐘となりました。

岡倉天心は、東京美術学校や日本美術院の創立に関わり、日本画家の育成に努めた後、1904年からボストン美術館に赴任しますが、この時の経験が「茶の本」を著す動機になった様です。

「茶の本」(THE BOOK OF TEA)は天心の死後、1929年に和訳され、版を重ねますが、茶道に留まらず、日本の思想や文化、そして東洋民主主義思想を欧米にPRしたものであり、目指す処は平和の推進とされています。実際、天心は「(一流国であるのが)戦争の名誉に拠るならば、寧ろ野蛮国に甘んじよう」という言葉さえ遺しています。

茶道は、道教の影響を受け、唐の陸羽の「茶経」により始まったとされ、明、宋で発展します。日本では、12世紀に南宋から栄西によって禅と茶道が伝えられてから、茶道は、足利義政に奨励され、16世紀に千利休によって完成します。そして、茶道は道教の老荘思想と禅の融合によって、日本独自の思想となります。

老荘思想は「不完全な虚を本質とする為、全ての可能性を内摂する」という思想で、ロータリーのインクルージョンと似ています。そして、この思想は日本文化のあらゆる基礎を成しています。茶室はまさに虚の空間で、来る人に無限の可能性を提供すると同時に茶室での出会いは一期一会となり、ロータリーの例会と同じく公平で心の涵養に繋がります。

一方、禅は「小さきものの偉大さを認める」東洋思想であり、「日常」に重要性を認めることです。一杯のお茶から無限の宇宙真理を知るこの思想により、人は目前の現実を掛け替えのないものとして味わうことができます。

東洋思想に於ける真の美とは、「不完全なものをみて完全なものにしようとする精神」にこそ見出せると天心は説き、一方、西洋の完全主義には無限はないとしました。

最後に、元RI理事の千玄室の茶と平和についての有名な言葉を紹介致します。

「一碗の茶の中に平和が込められている。お茶のグリーンを自然と考えると大自然を茶碗に入れられているのと同じです」